

旅のはじまり

ミッシーは熱い日ざしの下を歩きながら、うんざりするような暑さを味わっていた。かぶっていた帽子をうしろにはずして午後の太陽をあびてみたが、つば広の帽子をかぶって日ざしをさえぎったほうがよいのか、それとも熱い日ざしをあびてもかすかに吹く風を顔に受けたほうが気持ちがいいのかわからなかった。それにしても暑い。それでも日中のいちばん暑い時は過ぎたのだからと、慰めるように自分に言いつて聞かせていた。実際、やがて日の光が弱まれば、もう少し涼しくなるにちがいないかった。

旅の第一日目は恐ろしく長く感じられ、ミッシーにとって今朝のあの興奮するようなひと時が、まるで一週間も前の出来事のように思われた。だが、確かにあれはこの日の明け方の出来事だったのだ。

今朝の騒ぎを思いだすと、ミッシーはまたもや体中に痛みが走るのを感じた。彼女はウィリーといっしょに、本当に西部へ向けて出発したのだ。長いこと計画を練り、夢を描きつづけ、そしていまこうして二人で西部への道を旅している。それが現実であることを証明するように体中が痛み、疲れきっているにもかかわらず、ミッシーはまだ夢を見ているような気がした。

ガタガタと揺れる馬車の堅い木の座席の上で、少しでも居心地のよい体勢をとろうと、ミッシーは体をもぞもぞと動かしていた。ウィリーはとぼとぼと歩きつづける馬の手綱をとりながら、彼女のほ

うを見た。

「疲れたかい？」暑さで紅潮した彼女の顔を見ながら言った。

ミッシーは微笑みながら、汗でぬれた髪をうしろにかきあげた。

「ちよつとだけ。そろそろ、また足を伸ばさないといけないようだよ」

ウイリーはうなずいて、御している馬のほうに向き直った。

「君がそばにいないと寂しいけど、時どき歩いて体をほくすのは必要だからね。文句は言わないよ。いま降りるか？」

「もう少ししてから」ミッシーは、そのあとは何も言わなかった。

ウイリーは心配そうな目つきでチラッとミッシーを眺めた。

彼女は満足しきっているようだった。

「本当に騒がしくてほこりつばい旅だわね、この幌馬車隊っていうのは」ミッシーは言った。「馬具はぎしむし、ひづめの音はするし、人は叫ぶし。こんなにうるさいもんだとは、思ってもみなかったわ」

「この音に慣れてくると、そのうちこれでも静かだと感じるようになるさ」

「ええ、きつとそうね」

ミッシーは小さな手をウイリーの腕の中にすべらせた。彼が手綱で馬にしつかりした指示を与えるたびに、腕の筋肉が硬くなったり小さく波打ったりするのを感じた。そまつなめんのシャツは汗でぬれていて、襟首のボタンは二、三個はずれていた。

「わたしたちの音や騒がしさを、いっしょに持つてくればよかったわね」ミッシーが言った。

「どういふこと？」

「だって、ここ何週間つても、家の中がどんなだったか覚えているでしょ。わたしたちが計画したり、荷造りや梱包（くわんぱう）したり、積み込んだりして……。終わることがないんじゃないかって思うほどだった。みんなが一度にしゃべって、金槌（かなづち）が鳴り響いて、樽（たる）や鍋のぶつかり合う音がして。まるで蜂の巣をつついたみたいだったわ、あの時は」

ウィリーは声をたてて笑った。「まったく、そのとおりだったねえ」

しばらく二人は黙っていた。

もう一度、ウィリーがミッシーの様子をうかがうと、今度は彼女の明るいブルーの瞳に影が差しているのがわかった。しばらく黙って待っていたが、ミッシーがそれ以上何も言わないので、ウィリーは気をつかいながら話しかけた。

「えらく深刻に考え込んでるようだね」

ミッシーはそうつとため息をつくつと、ウィリーの腕に当てた手に力を入れた。

「そんなんじゃないの。ただ、家のことを考えていただけ。いまはすごく静かでしょうね。きつと恐ろしいほど静かよ。何日も、何カ月も、準備に明け暮れて……」物思いにひたつたミッシーは、そこでことばをとぎらせた。考え込んでいる彼女を見たウィリーは、じゃまをしないようにそうつとしておいた。

ミッシーは、いっばいに詰め込んだ二台の馬車のことを考えていた。二台の馬車にこれほどの荷物が積めるとは思いもしなかった。これから先、何カ月かのあいだに必要と思われるものはすべてこの

馬車に積み込まれて、しかも、それがなくても充分暮らしていけるにちがいないというような品物までもが積まれていた。特に、母さんが自分のへそくりで買っておがくずに詰めてくれた上等な食器を思いだした。「いつかきつと、これを持ってきてよかつたと思う日が来るわ」マーティは保証した。そしてミッシーは、いつかきつとこの食器を眺め、悲しみのまざつた喜びに胸が痛くなるだろうと思つてた。

突然、ミッシーは寂しさに襲われた。でも、ウィリーにこの気持ちを悟られたくなかつた。家のことを考え、愛する人たちのことを思うと、彼女の心の奥深くに鋭い痛みが走つた。うっかりすると涙がこぼれそうになる。つばを飲み込むと、無理に笑顔をつくつた。

「そろそろ、少し歩いてきたほうがよさそうだわ」ミッシーは元気をだして言った。

「あそこの、少し道幅が広くなつたところで止めよう」ウィリーが言つた。

ミッシーはうなずいた。

「僕たちの知つてる農場を通り越してしまつたのに、気がついてたかい？」ウィリーがたずねた。

「ええ、気がついてたわ」

「いよいよ現実になつてきたような気がするね。僕たちは本当に西部に向かつているんだって」喜びと興奮に満ちたウィリーの声を、ミッシーもワクワクした思いで聞いていたが、その瞬間、いまではなじみになつたあの痛みがまたも心の中でうずいた。ウィリーといつしよに西部に向かつている。でも、愛するものすべてをあとに残してきた。いつまたみんなに会えるだろうか？ いったい、ふたたび会うことなんてあるのだろうか？ 涙があふれ出そうになつた。

ウィリーが馬車を止め、ミッシーが車輪の上に足をかけて降りれるようにしてくれた時にはほっとした。馬車がふたたび動きだすと、あたりはもうもうとほこりが舞いあがった。ミッシーは思わずうしろを向き二、三步下がると、髪にほこりがかからないように帽子をしつかりとかぶり直した。馬車が通り過ぎるまで待つてからあたりを見まわし、馬車のあとについて歩いている人たちの中にすでに顔見知りになった人がいないか捜してみた。しかし、近くには知った顔も見えないようなので、そばにいた人たちに微笑みかけると、無言のままそのグループにまじって歩きだした。

ほこりっぽい、わだちのついた道を歩いていると、若くて健康に自信のあるミッシーですら体中が痛くてしかたがないのに、自分よりずっと年上の女たちがどうして歩きつづけられるのか不思議でならなかった。すぐ右隣を歩いている二人の女の人を眺めた。へこの人たちは、ママと同じくらいの年だわ。彼女は物思いにふけた。へママは元気で丈夫で、いつだってわたしなんかよりずっとよく働いていたけど、それでもママがこんな厳しい日を過ごすのなんか、わたしは見たくない。

二人の女の人はかなり疲れている様子で、ミッシーは彼女たちのことがとても気になった。すると突然、幌馬車隊の隊長ブレイクさんが今朝言った命令を思いだして、気が楽になった。初めの二、三日は一日の行程を短くするという命令を聞いた時、ミッシーはなんてばかっているんだろうと思った。しかしいまでは、ブレイクさんの判断がどんなに賢明なものだったか、よくわかりはじめていた。休めたらどんなにうれしいだろう。

ミッシーはウィリーののことを考えた。彼は今夜の早めの宿営を喜んでいるだろうか？ それとも、一刻も早く目的地に着くために先に進みたいと願っているだろうか？

ミッシーにはウイリーが自慢だった。彼の男らしいハンサムな顔つきが。少しカールした黒髪、深い茶色の目、がっしりしたあごにできるえくぼのような（彼女がそう言うのを、ウイリーは決してゆるさなかつたが）へこみ、そして彼が九歳のとき木から落ちて打つたのに、かろうじて形が変わらなかつたかっこいい鼻。それが彼女のウイリーだった。それにがっしりと広い肩、背の高い体つき、たくましい腕も。

でもミッシーがウイリーを自慢に思うのは、外見ばかりではなく、つき合つていくうちにわかつてきた彼の性格だった。彼女の思いをすぐに読みとり、他の人のことをまず第一に考え、他人にはやさしく自分には厳しいウイリーだった。彼はいったん決断したら、強い意志と目的を持つて行動した。ほんの少し頑固だと言う人もいるが、ミッシーはむしろ、彼は「堅固」だと表現したかつた。そう、夢に関して言えばちよつと頑固なところもあると、彼女も認めていた。牛を飼つて育て、素晴らしい馬とともに働き、自分の牧場を持ち、もつと西へ行くこうとする彼の夢。

二年ほど前、ウイリーが自分の牧場を捜しに西に向かつて一人で旅に出た時、彼はいつ終わるともしれない探索をやりとげ、赤いテープ「公文書を縛るテープ」を求めて、土地の権利を実際に手に握るまでがんばり通した。そして牧場を開くのに必要なお金を貯めるため二人の出発が遅れた時でも、じれてはいたけれど、ウイリーは夢を失うことはなかつた。彼は製材所でけんめいに働き、充分な額が貯まつたと確信できるまで、一ペニーたりとも無駄づかいせずに貯金した。ミッシーも、少しでも早く額が増えるようにと、教師をして得た給料をできる限りとり分け、資金に加えた。そうすること、自分もいっしょに彼の夢を見ているような誇らしい気分になつていた。

ミッシーは空を見あげて、太陽の位置から時を計った。三時か四時頃にちがいない。

家ではこの時間、仕事にひと区切りついているはずだった。いま頃、母さんは体を動かす大変な仕事を終え、ひと息ついてお気に入りの椅子に座ってつくろい物をしたり、編み物をしたりしているだろう。父さんはまだ畑にいるにちがいない。

父さんと母さんも、惜しみなくウイリーの貯金に協力してくれた。彼女は両親との最後の時を思いだしていた。

今朝、別れを告げる時、二人はとても雄々しかった。クラークはみんなを自分の周りに呼び集めると、いつものように祈ってくれた。マーティは泣くまいと必死になってこらえていたが、ミッシーに「いいのよ、ママ。泣きたいだけ泣いてちょうだい」と言われると、とめどもなく涙を流していたっけ。二人はしっかりと抱き合い、思いっきり泣くと、やがて心は安らぎ、慰められた思いになった。

いつの間にか流れ出た涙をふき払うと、ミッシーはだれかに見られたのではないかと、思わずあたりを見まわしてしまった。彼女は無理やり寂しい思いを心からしめだした。よほど気をつけていないと、目を真っ赤にし、涙でシミになったひどい状態の顔で宿営しなければならなくなる。それに、ウイリーがいてくれるのだから、寂しくてたまらなくなることはない。

疲れた足を一步一步進めながら、ミッシーはとぼとぼと歩きつづけた。頑丈な靴を履いた彼女の足はさらに小さく見え、茶色の地味な木綿の服を着ていても、そのほっそりした体つきからは若さがにじみ出ていた。彼女は手をあげると、どうしても顔にかかってくる金髪のほつれ毛をかきあげた。じつとりと汗をかいたひたいには、髪がまとわりついていた。いつもは色白の頬ほおも、日中の暑さで赤く

ほてっていた。ホームシツクと、疲れと、照りつける太陽にもかかわらず、彼女の澄んだ明るい瞳は、あたりのものを何ひとつ見のがすまいとしてクルクル動き、興奮で輝いていた。

ミッシーは、そばを歩いている旅の仲間らに注意を向けた。何人かの女の人は、馬車について歩きながら枯れ木や小枝を拾い集めていた。また子どもたちにも、燃料にできるようなものをあちこち走って集めさせている人もいた。(みんな、少しでも早く馬車が止まってくれないかまって待つてるにちがいないわ)とミッシーは思った。そして自分でも、火をおこす時のために小枝を探しながら歩いた。

なにやら騒がしくなつたので前のほうに目をやると、幌馬車が列を崩し、今朝言われていたように円を描くように動きはじめていた。ミッシーの足どりが軽くなつた。まもなく日陰に入つて休むことができる。ちよつとのあいだでも座つて、ほてつた体や頭を午後の涼しい風で冷やせたらどんなに素晴らしいだろう！それに、二人が離れていたわすかばかりのあいだウィリーがどうしていたか、彼とおしゃべりするのを待ち遠しかった。

今夜、キャンプファイアの明かりのもとで、ウィリーに「たぶん」父親になるだろうと話すべきかどうか考えながら、胸をドキドキさせていた。彼女は今までには確信を持っていたが、ウィリーにはまだ何も告げていなかった。(はつきりしてもいけないのに、望みだけを与えちゃいけないわ)と自分に言つて聞かせた。

ウィリーは喜んでくれるかしら？彼は無類の子ども好きだし、息子ができるのをそれは楽しみにしているのを知っていたが、同時に彼女の体を気づかうだろうとわかつていた。それに、彼は無事に西部への旅を終え、そこで落ち着いてから家族が増えるのを願っていることも。妊娠している女性に

とつて、長い幌馬車の旅はとても厳しいものになるだろうから。そうよ、ウィリーはおなかの赤ちゃんがふさわしくない時にやつて来たと思うかもしれない。でもミッシーはそんな心配はしていなかった。自分は若くて健康で、そのうえ赤ちゃんが生まれるずっと前にウィリーの土地へ着くことになっているのだから。それでも、本当に旅に出てしまふまでウィリーにこのことを知らせなかったのは認める。もし彼が知ったら、旅を延期しようと言いだすのではないかと恐れていた。そうでなくても、彼は出発が遅れているのをとでも気にしていたのだから。

そんなわけでミッシーは秘密を大事に守つて、母親の耳にさえ入れなかった。どんなに母さんに話したいと思つたことか。〈話したら、母さんはきつと心を痛めるわ〉ミッシーは心の中でつぶやいた。〈わたしたちが旅にいるあいだは、一晩だつてぐっすり休むこともできないでしょうから〉

ミッシーは大きな円の中に並んで止まっている自分たちの二台の幌馬車を見つけた。

ウィリーは一台目の馬車から馬をはずして、御者として雇つたヘンリー・クラインが二台目の馬車のところで働いていた。何週間か前に荷造りをはじめた頃、住まいのための必需品に加え食料品などを運ぶには、一台の幌馬車ではとうてい積みきれないことがわかつた。クラークはもう一台馬車を用意することを勧め、御者まで捜してきてくれた。幌馬車隊の他のメンバーも、西部に移り住むにあつて一台以上の馬車を用意していたが、幸運なことにその人たちは馬車を御せる家族の者が他にいたので、その点は楽だつた。

隊に近づくと、ミッシーは幌馬車が並んで円を閉じるのを眺めていた。最後の二十七台目の馬車が所定の場所に入つてきて、完全な円ができあがつた。

笑顔で彼女を待つていたウイリーに、ミッシーも微笑みながら近づいていった。

「長い一日だったね。疲れてるようだよ」彼は心配そうに言った。

「ちよつとだけ。太陽が照りつけてあんまり暑いものだから、干からびちゃったんじゃないかしら」

「これからは充分休めるよ。あそこのちよつとした日陰で休んでいれば元気になるさ。馬車から椅子か毛布を持ってきてやろうか？」

「自分でするからいいわ。あなたは馬の世話があるでしょ」

「ブレイクさんの話では、その木立の向こうに川があるっていうから、家畜をみんな連れていって水を飲ませて、谷間につないでおくことにするよ。草も豊富にあるそうだから」

「何時ごろ食事にしたらいい？」ミッシーが聞いた。

「どつちにしても二、三時間はかかるだろうから、君は充分休むといい」

「もつとたきぎが必要な。わたし、歩きはじめてすぐに集めなかつたものだから。あそこに持つてきたものだけじゃ、間に合わないわ」

「急いで火をおこす必要もないさ。僕が帰りがけに拾い集めてくるよ。ヘンリーだつて手伝つてくれるだろうしね。とにかく、しばらくは日陰に入っていなさい。ひどく疲れてるみたいだから」ウイリーは心配そうな声で言った。

「興奮と、なじみのないことばかりだつたからだと思うの。いまに慣れるわ。でも、ちよつとだけあそこの木陰で休もうかしら。しばらく足を投げだしていれば、すぐにもとどおり元気になるわ」

ウイリーが馬車のうしろにつないでいた二頭の乳牛と馬を連れて出かけていくと、ミッシーは毛布

をとってきて木の下に敷いた。

毛布の上に座ると、なにやらうしろめたい気がした。他の女たちはみんな忙しそうにしているようだった。とにかく少しだけ休んで、それから自分も働こう。いまは、ただ座っているだけで気分がよかった。

ミッシーは気持ちよさそうに木の幹に寄りかかると目を閉じ、少し頭を曲げてそよ風を体中に受けられるようにした。風は彼女のほつれ毛をもてあそび、ほてった頬を心地よくなでていた。なんて体が痛いんだろう。体中の骨が、温かいお湯の中につかって休みたいと叫んでいた。家にいれば……。ミッシーは急いでこの思いを心からしめだした。家族のいる、居心地のよい台所と広い階段のあるあの大きな白い家は、もう自分の家ではない。明るい色の敷物を敷き、フリルのついたカーテンのかかった二階の部屋は、もはや彼女の部屋ではなかった。いまでは、すべてがウィリーの責任のもとにある。ウィリーが彼女のものだった。彼女は、ウィリーのような夫に値する妻となり、幸せと愛に満ちた家庭を彼のためにつくりあげることができると祈った。その時、目を閉じたまま、毛布の上に痛んだ体が沈み込んでいくのを感じた。

（ほっておきなさい）彼女は自分に命令した。（ほっておけば、そのうち痛みは消えていくわ）

一日の終わり

目をさますと、あたりの様子がすっかり変わっていて、ミッシーは驚いてしまった。いまはずっと涼しくなっていて、日中の焼けつくような暑さで照りつけていた太陽は、穏やかな様子で機嫌よく西の空に傾いていた。

たきぎの煙が立ちこめ、なんとも言えない心地よい香りを放っていた。料理している匂いとコーヒーの香りをかぐと、ミッシーの胃は空腹のあまり刺すように痛くなってきた。やがてしつかり目ざめて、みんなが食事の支度をしているのに気がつくとき、きまりが悪くなってしまった。きつと自分が眠ってしまっているあいだ、他の女たちは忙しく立ち働いていたにちがいない。みんなはわたしのことをなんて思ってるだろう。ウィリーが家畜の世話をしてもうすぐ帰ってくるのに、火もおこしてないなんて！

ミッシーはスカートを払い、髪をうしろになでつけながら馬車のほうへと急いだ。

しばらく嘔然あげんと立っていたが、ようやくミッシーは、自分たちの馬車の前で燃えている火は「彼女のもの」で、シチューのおいしそうな匂いとコーヒーの香りは「彼女の鍋」から漂よってきたものだと気づいた。

これはどうしたことだろうと考えあぐねていると、ウィリーが馬車から顔をのぞかせた。心配そう

な目で彼女を見ていたが、すぐにほっとした様子で言った。「元氣そうになったね。気分はどう？」

ミッシーはつつかえ、つつかえ言った。「わ、わたしは、元氣よ……ほんとに、なんともないわ」それから、小さな声でつけ加えた。「でも、死にそうに恥ずかしいわ」

「恥ずかしい？」ウィリーの声がミッシーには必要以上に大きく聞こえた。

「何が恥ずかしいんだい？」

「だって、わたししたら、昼間つからあそこに座って眠ってしまって、あなたに……あなたが火をおこして、それからコーヒーまで。ああ、どうしよう。みんなわたしのこと、なんて思ってるかしら。夫が自分の仕事をしたうえに、妻の仕事までしなくてはならないなんて」

「そんなこと気にしてるのかい。それじゃ、これからは、こういう生活に慣れないと。それに、火をおこしたのは僕じゃない。ヘンリーがやったんだ。彼は食事が待ち切れないでね。まったく、やつのおこしたの！ 目的地に着かないうちに、やつこさんを食わせるために、あの牛を二頭とも肉にしてしまわなければならんぞ」

「ヘンリーはもう食事をすませたの？」

「ああ。僕たちのために少しだけは残してくれたようだがね。どうも、急いで出かけたかったらしい。たまたま、この幌馬車隊に、若い娘さんが何人かいたらしくてね。たぶんヘンリーは、なんとか知り合いになろうとしてるんだらうよ」こう言ってウィリーは片目をつぶって見せた。

「あなたは、来ないの？」ウィリーがいつこうに馬車から降りてくる気配がないので、ミッシーはたずねた。

「パンを探してるんだ。こちらへんの壺つぼや缶や箱を全部当たったんだけど、見つからないのさ。いったい、どこにしまったんだい？　ヘンリーはパンなしでががつ食ってたけど、僕はパンといつしょに食事がしたいんでね」

ミッシーは笑った。「ほんとに！」ミッシーは首を振りながら言った。「もうちよつとで口にできたのに。すぐそこよ、目と鼻の先にあるじゃない」彼女は馬車によじ登って言った。「ほら、とつてあげるわ。ママがわたしたちの初めての夕食のためにつて、特製のタルトもつくつて持たせてくれたのよ」

入れ物の中からパンとバタータルトをとりだしていると、ミッシーはまた心の奥のほうで何かがうずくを感じた。愛する若い二人のために特別に焼きあげたタルトを、オーブンの上にかがみ込んでとりだしているマーティの赤い顔を思い浮かべた。

ウィリーはミッシーの気持ちを察したらしく、腕を伸ばして彼女を引き寄せると、しっかりと抱きしめた。

「母さんいま頃は、君がいなくて寂しい思いをしているだろうな」彼女の髪に唇を当てながらそつと言った。

ミッシーはのどをつまらせた。

「きつと、そうね」彼女はささやいた。

「ミッシー？」ウィリーはとまどうように言った。「ほんとにいいのかい？　いまならまだ帰れるんだよ。もし、自信がなかったら……。もし、君が不安を感じているなら……」

「まあ、とんでもないわ」ミッシーは力を込めて言った。「わたしの心に不安なんかこれっぽっちもないわ。あなたの土地に行つて、そこで家をつくるのを楽しみにしてるのよ。あなただつてわかつてるでしょ！ 確かに、母さんや父さんや家族のみんなが恋しいわ。特に初めのうちはね。でも、わたしも大人にならなきゃ、それだけよ。だれだつて、いつかは大人になるんですもの」どうしてウィリーは、わたしが彼の夢を受け入れられないような、そんな自分勝手な人間だつて思つたりするんだろう？

「ほんとに？」

「ええ、ほんとよ」

「ええ」

「それに、向こうに着いてからだつて楽じゃない。僕たちにはまだ住む家もないし、隣人もいないし、教会もない。そのすべてが恋しくなるよ、ミッシー」

「わたしには、あなたがいるわ」

ウィリーはもう一度、彼女を腕の中に抱き寄せた。

「君が失つたすべてのものを、僕はどれだけ埋め合わせできるかわからない。でも、ミッシー、僕は君を愛してる。本当に心から君を愛してるよ」

「わたしが必要なのは、それだけよ」ミッシーはささやいた。「わたしが何もできないのは、愛がない時だけ。だから……」彼女はつま先立つて彼のあごにキスをした。「あなたがわたしを愛していてくれさえすれば、わたしは大丈夫よ」

ミッシーはやさしく彼の腕から身を引いた。「そろそろ、あなたのつくってくれた夕食を食べたほうがよさそうだわ。わたし、ものすごくおなか为空いてるの」

ウィリーはうなずいた。「でも、僕のつくったのを口にしたらたん、君は気が変わるかもしれないよ」二人はいつしよになつて笑つた。

食事が終わつて、ミッシーがあと片づけをすませると、ウィリーは二人の聖書をとりだしてきた。それは、やわらかい鹿の皮のカバーをつけ、さらに油紙でていねいに包んであった。

「考えてみると、これから朝は時間がなくて忙しくなるだろうから、夜に聖書を読む時間をとったほうがいいかもしれないな」

ミッシーはうなずいて彼の隣に腰を下ろした。まだ充分読めるくらいの明るさはあつたが、やがてすぐに暗くなつてしまふだろう。ウィリーは落ち着いた声で読みはじめた。

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。」（イザヤ書四十一章十節）

彼はゆつくりと聖書を閉じた。

「君の父さんが、僕たちのためにここにアンダーラインを引いてくれたんだ。今朝、この聖書をくれた時、僕にこの箇所を読んで、赤いリボンをはさんでくれた。ここの聖句が真実で意味のあることばとして、僕たちが心から受け入れられるまで、毎日読みなさいと言つて」

「素晴らしいことばだわ」ミッシーが言った。彼女の声は震えていた。目を閉じればいつだって、台所のテーブルに座つて家族の聖書を開いている父さんの姿を思い浮かべることができる。そしてそ

の周りに集まっている家族の一人ひとりの顔を。朝の祈りの時間に、父さんがみんなの前で祈っているその声までもが耳に残っている。わたしの父さん……家族の心の導き手。いや、もう、そうではない。ウイリーがわたしの家族の長で、彼こそがわたしの心の導き手なのだ。いまでは一日一日ウイリーを頼りに、彼とともに生活しているのだから。幸せな時も辛い時も。もはや、クラークの小さな娘ではない。一人の女性であり、妻なのだから。

クラークは彼女を、自分の手からウイリーの庇護ひごと守りのもとにゆだねたのだ。そして、父親としていつも彼女を愛し、彼女のために祈りつづけていたが、同時に、娘がこれからの人生において最良の場所を得たことを満足を持って受けとめていた。ウイリーとともにいることを。

ミッシーはウイリーの手をとると、しっかりと握りしめ、そして二人は頭こぶをたれた。ウイリーは、この日一日神様が彼らとともにいてくださったこと、また、あとに残してきた家族からの愛を感謝した。彼はこの困難な時に神が慰めてくださるように、自分とミッシーが家族から離れて生活することを学べるようにと祈った。そして二人の旅が無事に守られるように、これからの長い旅路において特にミッシーの健康が支えられるようにと、彼女の体調を気づかって祈った。

ミッシーは、今夜は彼女の秘密を打ち明けないでおこうと決心した。ウイリーをこれ以上心配させたくなかったからだ。馬車の上での揺れと歩くことに慣れ、旅の生活に充分対応できるようになつてからでも遅くはない。それに、自分がまちがっている可能性だってあるのだから。

心の奥で、ミッシーはきつと妊娠していると確信していたが、本当に妊娠していたら、一日ごとに新しい活力と力をつけていかなければならない。実際、新鮮な空気と運動はきつと体にいいだろう。

待とう。ウィリーが自分の目で見て、彼女が健康で丈夫だと認めるまで待つて、それからこの秘密を打ち明けよう。そうしたら、彼も自分と同じように、この素晴らしい出来事を喜んでくれるだろうから。

ああ、父さんや母さんにこのことを知らせることができたら、どんなにいいだろう。二人の顔を見つめながら、喜んでこう言うの。「二人とも、おじいちゃんとおばあちゃんになるのよ。ねえ、どう思う？」きつと抱き合つて、笑つて、泣いて、幸せの渦になるわ。この知らせを伝えられたら、きつと楽しいだろうに。でも、そうはならなかつた。それに、いまはウィリーにだつて話す時期ではない。彼女は待つことにした。